



# 闇に眠るもの 続編

3月26日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

### 3月26日のおはなし「闇に眠るもの 続編」

---

あのようなことはするべきではなかった。そう指摘する声が聞こえる。同時に、あの日わたしが貪り尽くしたもののほど美味しいものはなかったと全身の細胞がその自堕落な快感の記憶にうち震える。それはわかる。頭の中の声という。しかもっと冷静であるべきだ。しっかり相手を選んで。あるいは程度というものを知って。

そうだ。いまのわたしの仕事は相手を選ぶことだ。誰を仲間にするか。誰を葬り去るか。わたしたちの仲間を復活させ、再び繁栄させるために。不慮の出来事から多くの仲間を失い、気がつけば狩る立場が逆転して狩られる立場となってしまった。彼らには身の程というものを思い知らせなければならない。

フランツとジルのおかげで目を覚ましたわたしは、あれからしばらく自分の中に根を下ろした人間としての意識との同居に苦しんだ。なにしろ20年近く人間として暮らしていたのだ。人間としての意識や常識や感じ方や考え方は、頭の髪の毛一本一本の先から足の爪先にいたるまでべったりとしみついていて、容易なことではぬぐいさることができなかった。

けれども、何度か狩りを実行し、人間達の生命力を吸い取り、時には遊び半分に血管を食い破り血をすすするうち、20年に及ぶ習慣を薄れさせ、愚にもつかない常識を追い出し、人間に対する役立たずな愛情をばらばらにまき散らすことに成功した。しかし、このようなやり方は、元々のわたし自身のやり方とも違っている。そのことは意識しないわけにいかない。わたしは目覚めることができたが、かつてのわたしと同じではいられない。20年の空白より前のわたしといまのわたしは別物だ。

\* \* \*

何年間にも及ぶ飢えがわたしを変えてしまったのだろうか？ あるいはかつてのわたしが味わったことのなかった禁断の味を、あの時初めて口にし、すっかり味をしめってしまったのだろうか。傍らに眠るジルの寝顔を見ながらわたしは思う。

ジルは美しい女だ。こうしてすやすや眠っているときにはっきりそのことがわかる。伸ばした前髪を除くとその明るい金髪はきりっと短く揃えられ、形のいい耳の縁が隣室からの明かりを反射してぼんやり浮かびあがっている。すらりとした長身で、整った乳房の形も、脇腹の曲線も、そして薄い陰毛も、張りのある臀部から太腿にかけても、長い脚も、そのままモデルとして食べていけるような容姿だ。

けれども有能な秘書としてわたしに従う時も、ベッドの中でわたしを受け入れ快感に喘ぐ時で

さえも、彼女の顔に張り付いた根源的な恐怖の表情のため、その美しさはいくらか減じることになってしまう。そしてその恐怖の表情を目にすると、わたし自身の中に抑えようのない衝動が膨れ上がってくる。そのことをどうすることもできない。

わたしに刺し貫かれ、性器からくる快感に溺れそうになっている時でさえ、そんなわたしの中の危険な衝動を感じ取ると、ジルは声にならない悲鳴を上げ、もがき逃れようとし、恐怖のあまり失禁し、時には文字通り気を失ってしまう。その無様な様子を見ながらわたしの中の衝動はますます猛り狂い、わたしの全身を覆い尽くしていく。

それがホテルの一室であれ、オフィスであれ、あるいはジルの家であれ、全ての明かりが失われ、闇が訪れ、キラキラが出てくる。キラキラはわたしたちを取り囲み、次第に渦をまきながらわたしの中に入ってくる。そうなるともう、わたし自身が自分を制御しきれなくなる。口に含んだジルの乳房や脇腹や首筋を噛み切ってしまうようにするのが精一杯だ。瞳の中で激しくペニスをスライドさせながらジルの身体を内側から開いていき、一切の抵抗力を奪い、肌に吸いつかせた掌からは吸収できる限りの生命力を貪りジルを死の縁にまで追いやってしまう。

それからわたしは我に返り、全力でジルを蘇生させる。掌からも唇からもペニスからも触れ合う肌の全てから生命力を注ぎ込み、ジルを生き返らせる。わたしの中で暴れる衝動を、ジルを食べ尽くしてしまおうとする衝動を懸命に押さえ込み、再びジルの命を満たすことに全力を尽くす。その矛盾した作業の頂点でわたしは射精し、キラキラが薄れ、部屋の明かりがともる。やがてジルの意識が戻る。

何も覚えていないジルは、少しずつ意識を取り戻す中でとぎれとぎれの浅い呼吸をもらしながら、快感に溺れていたことを恥じらってみせる。それからあわてて愛されたことへの感謝の念を付け加え（殺さずに生かしてくれたことへの感謝の念だ）、再びわたしを苛立たせる。わたしが苛立つのを見て、またジルの顔に恐怖が浮かぶ。その表情はこう訴えている。食べないで。わたしをフランツみたいに食べてしまわないで。

（「闇に眠るもの 続編」 ordered by delphi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

闇に眠るもの 続編

<http://p.booklog.jp/book/46702>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46702>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46702>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.